

宮田直彦のエリオット波動レポート

マーケット見通し(短期アップデート) 6月14日 12:55 PM 更新

[日経平均]

【当面の想定レンジ】 35,600~40,000 円

[NY ダウ]

【当面の想定レンジ】 36,000~39,600 ドル

[ナスダック]

【当面の想定レンジ】 14,500~17,700

[米ドル/円]

【当面の想定レンジ】 137.000~161.350 円

[ドルインデックス(ドル指数)]

【当面の想定レンジ】 99.578~108.350

エリオット波動とは

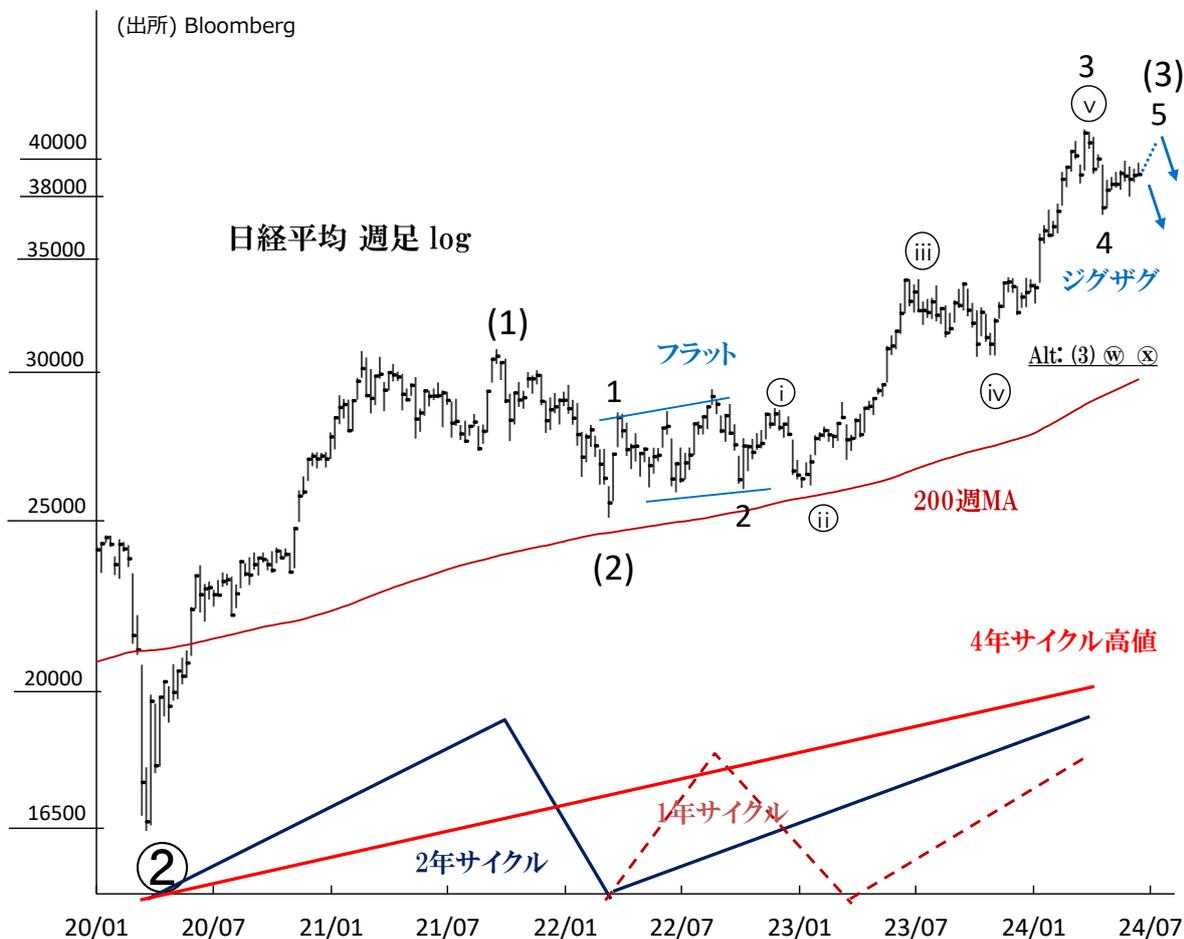
株式・為替動向を予想する心強いテクニカル手法

米国人ラルフ・ネルソン・エリオットが提唱した、今後の株式や為替など市場価格の動向を予想する手法です。相場は5つの上昇波と3つの下降波（合計8つの波）で一つの周期を作るパターンに従って展開するとされます。

このパターンは集団心理によるもので、数分から数十年といった様々な時間軸において観察されます。

フィボナッチ数列、黄金分割比率をチャート分析に初めて導入したのもエリオットです。

日経平均



【週足・エリオット波動分析】

4月19日安値(36,733円)は、インターメディアイト級第(3)波における、マイナー級第4波(ジグザグ)の終点であり、そこからの上昇はマイナー級第5波とカウントされます。

このマイナー級第5波の上昇完成を以て、22年3月安値(24,681円)以来の(インターメディアイト級)第(3)波は終わります。その後はインターメディアイト級第(4)波による調整局面に移ることになります。

今月(6月)は現行4年サイクル底の注目月ですが、今月中に第5波と第(4)波を完成するには到底時間が足りません。おそらく4年サイクル底を付けるのは、7月~11月※のことでしょう。

※4年サイクル(48カ月)の伸びしろ(オーブ)は8カ月(48カ月の六分の一)です。20年3月から4年8カ月が経過する時点が今年11月です。

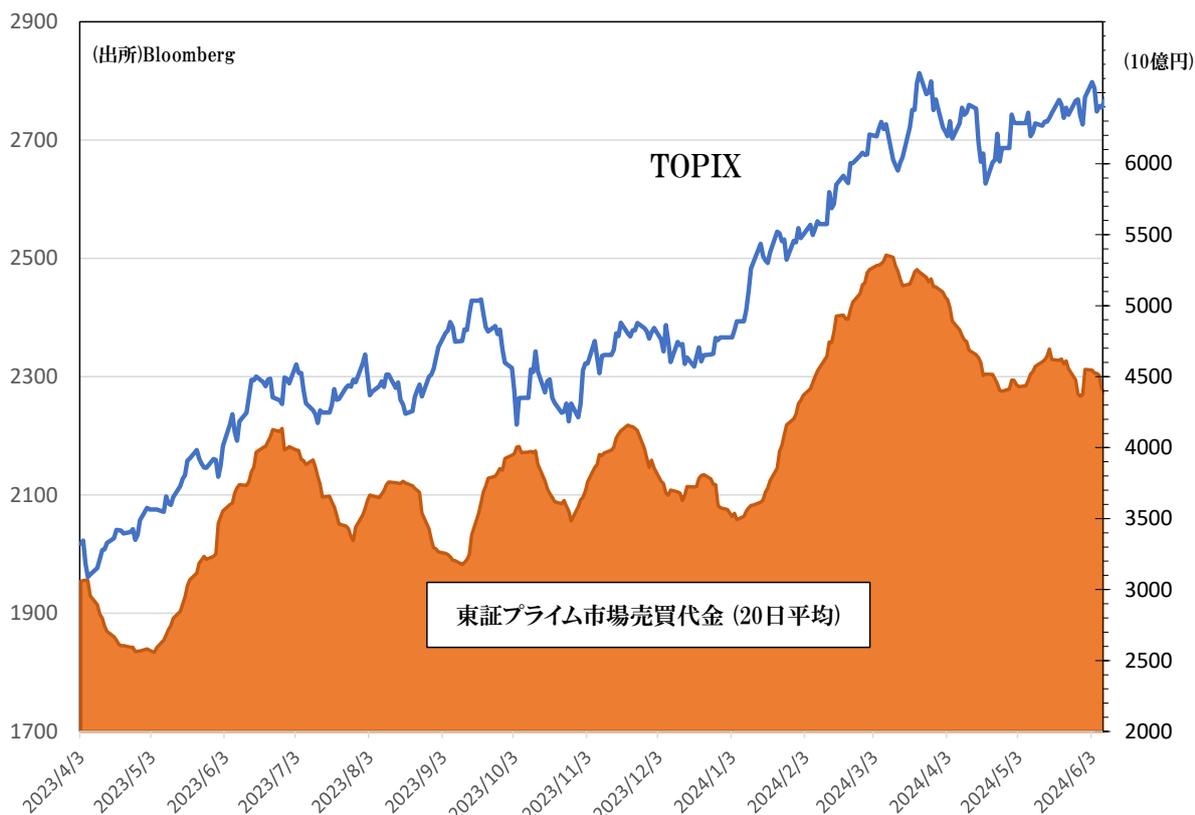
もう一つの見方は、3月高値から既に第(4)波に入っている、というものです。

なお現行4年サイクルの終わり第(4)波の終わりは、必ずしも一致しません。

日経平均の第(2)波(21年9月~22年3月)は半年間にわたる[ジグザグ]でした。

[オルタネーション]に基づく、第(4)波には[フラット]や[トライアングル]など、第(2)波に現れたジグザグとは異なるパターンが現れやすい、といえます。

例えば第(4)波がフラット(A-B-C)と仮定した場合、A波安値と4年サイクル安値が重なり、第(4)波自体の完了は25年以降になる、ということが考えられます。



出来高の減少が株安に先行?

ここ2カ月ほどは、日本株全体に対し売り圧力の強さが目立ちます。企業業績のモメンタム減速に伴い、日本株の上昇には急ブレーキがかかっています。

今年1~3月の日本株強気局面では、出来高と売買代金がリンクして急増していました(これは教科書的な強気相場です)が、**3月下旬以降の市場エネルギーは減少傾向**にあります。

今月3日にはTOPIXが一時2809と、3月高値(2820)に接近する場面がみられました。しかし売買代金が大きく増えない中では、TOPIXの高値更新は難しいか、あるいは高値更新があっても短命に終わりそうです。

「出来高は株価の先行指標」といわれます。この経験則に基づけば、株価の本格調整はむしろこれからかもしれません。



【日経平均 日足・エリオット波動分析】

36,733 円(4/19 安値)から、マイナー級の第 5 波による上昇が進行中とみられます。

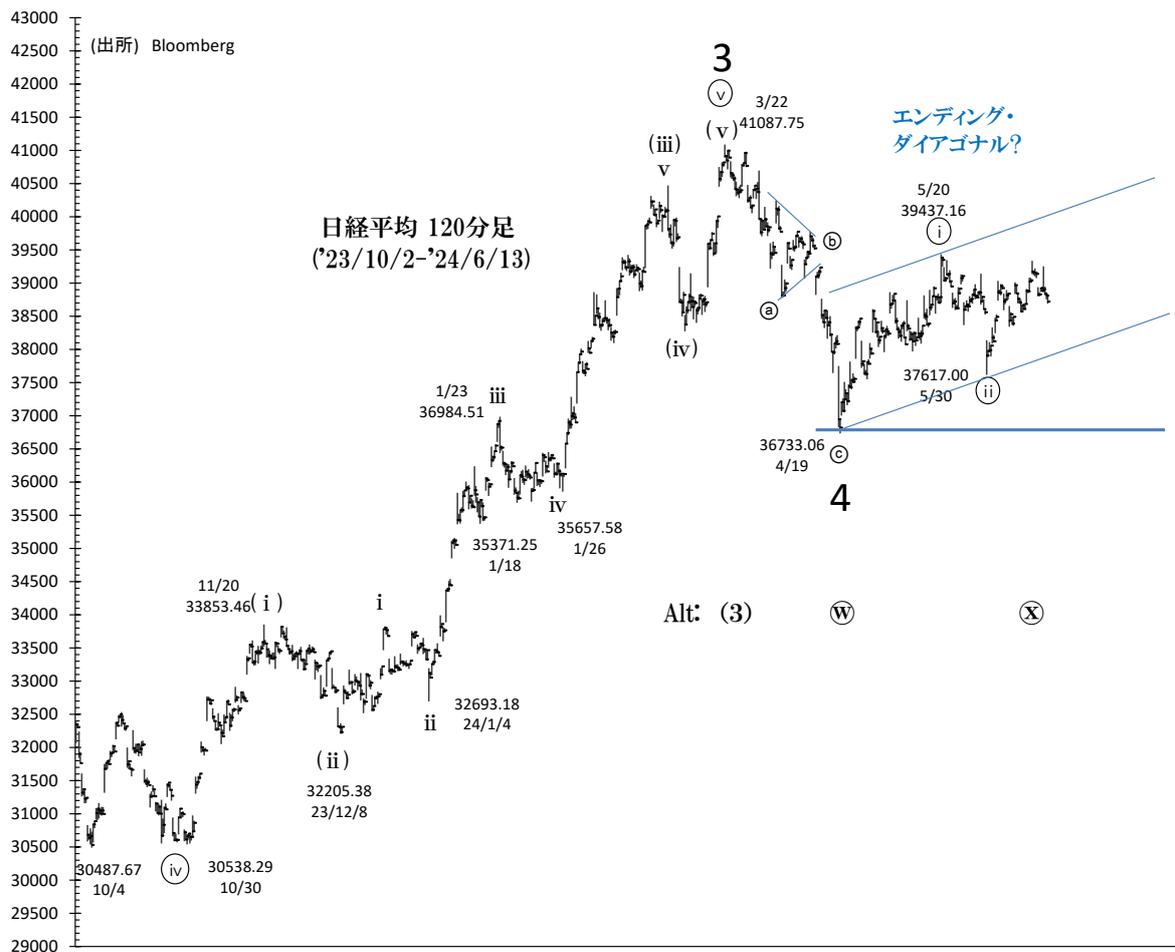
現行第 5 波の内部構造は、波の重なりが多いチョッピー(choppy)なものであり、典型的な(すっきりとした)衝撃波ではありません。このことは、第 5 波が「エンディング・ダイアゴナル」編成で上昇している、という示唆となっています(次の時間足チャートをご覧ください)。

なお TOPIX コア 30、TOPIX バリューストック株指数、JPX 日経インデックス 400 などは、3 月高値を一時上抜いています(6/3)、日経平均の(3)-5 波の終点高値は 3 月高値(41,087 円)には届かない[フェイラー]の可能性もありそうです。

[オルタナティブ・カウント]

現在の調整はインターミディエイト級の第(4)波です。

36,733 円を下抜くとこの見方が有力となり、もっとも厳しいケースでは、日経平均は 3 万 1000 円処へ下押す可能性があります。



【日経平均 時間足・エリオット波動分析】

36,733 円(4/19 安値)以来、マイナー級第 5 波による上昇が展開中です。

この第 5 波は[エンディング・ダイアゴナル]とみられますが、そのうちマル i 波は 39,437 円(5/20 高値)で、マル ii 波は 37,617 円(5/30 安値)で終わり、そこからはマル iii 波による上昇とみられます。

この見方が正しければ、マル iii 波は 39,437 円(5/20 高値)をいったん上抜きます。その後はマル iv 波の下げ(39,437 円と重なるでしょう)があり、そして最終的にはマル v 波の上昇へ続くでしょう。

なお当面のサポートは 37,617 円ですが、それを下抜くと 36,733 円を維持できるかが、次の焦点になります。仮に 36,733 円をも下抜くようであれば、既に第(4)波の調整に入った可能性が高いでしょう。

NYダウ



【NYダウ日足・エリオット波動分析】

NYダウは22年1月高値(36,952ドル)から、プライマリー級④波を展開中とみています。22年10月からの上昇は④波における(B)波であり、それは「不規則天井(イレギュラー・トップ)」です。(B)波の後に続く(C)波の下落スケールは、(A)波の下落(22年1月～22年10月)に匹敵するか、あるいは、より大きなものになるでしょう。

22年10月安値(28,660ドル)を起点とする④波中(B)波の上昇は、ダブル・ジグザグ[W-X-Y]。そのうち、23年10月安値(32,327ドル)からの上昇はY波ジグザグ[(a)-(b)-(c)]です。

そして、このY波は40,077ドル(5/20高値)で天井を打ち、④-(C)波による下落が始まったかもしれません。この見方は37,611ドル(4/18安値)を下抜くことにより強められ、NYダウは当面、200日MA※を目指し下落していく展開が想定されます。

※200日MA…36,978ドル(6/13)

採用銘柄にエヌビディアを持たないNYダウ(ダウ工業株30種平均)は景気に敏感です。ナスダックやS&P500に先行して高値を付けたNYダウは、米景気後退入りのリスクを敏感に嗅ぎ取り始めたのかもしれない。



【NY ダウ時間足・エリオット波動分析】

40,077ドル(5/20 高値)から 38,000ドル(5/30 安値)までは第(i)波による下落、そこから第(ii)波によるリバウンドと位置付けられます。

39,120ドル(6/12 高値)は想定レンジ[39,039ドル-39,284ドル]内にあります。さらに、その後の弱い動きは第(iii)波入りとの見方を強めています。

38,000ドルを下抜くと、ヘッド・アンド・ショルダーズから下放れ開始となり、次は 37,611ドル(4/18 安値)を試すでしょう。

一方 37,611ドルが維持される限り、上値追いのチャンスは引き続き残っています。

仮に 3月高値からの(b)波を「ランニング・トライアングル」とみれば、38,000ドル(5/30 安値)からはトライアングル中 d 波に位置付けられます。この場合、来る e 波の下げによっても 38,000ドルは維持され、40,077ドルを上抜くような、「最後の上昇」があるでしょう。

ナスダック



【ナスダック総合指数日足・エリオット波動分析】

22年12月からの上昇は、プライマリー級第④波における(B)波に位置付けられます。(B)波終了後には(C)の下落がスタートしますが、(C)波によりナスダックは12,500~10,000へ下落する可能性があります。

④-(B)波による上昇はこれまで、[ダブル・ジグザグ(W-X-Y)]を形成しています。今年4月安値(15,222)からの上昇は、Y波(①-②-③)中③波に位置付けられます。

そして③波完了に必要な、(i)波~(v)波の五つの波動は、足元までにすべて揃っています。上昇トレンド終了は時間の問題とみられます。

6月13日高値(17,741)は、フィボナッチ比率からのチャート節目[17,692]を満たし、23年10月からのチャネル上限にも達しています。

[17,691]…①波(23年10月安値12,543→24年3月高値16,538と、③波(24年4月安値15,222~)が、上昇幅において黄金比(1:0.618)になる水準

6月11日~12日のギャップ(17,345-17,490)を早々に埋める動きがあると、上昇トレンド終了が示唆され、まずは16,500 処への調整リスクがあります。



【フィラデルフィア半導体株指数(SOX 指数)・エリオット波動分析】

22年1月高値(4068)以来のパターンは[エキスパンディット・フラット]、あるいは[ランニング・フラット]と想定されます。どちらのパターンも内部構造は(A)↘-(B)↗-(C)↘です。

[エキスパンディット・フラット]の場合、(C)波の下落により、SOX 指数は22年10月安値(2089)を大きく下回るでしょう。

[ランニング・フラット]だと、(C)波の下落によっても22年10月安値は維持されます。それでも(C)波のスケールは、22年の下落(A)波に匹敵する大きなものになると思われます。

22年10月安値(2089)以来の上昇は、[ダブル・ジグザグ(W-X-Y)]編成となっています。そして今年4月安値(4287)からの上昇は、Y波中◎波の上昇に位置付けられます。

この◎波を構成する必要な5つの波はすべて揃っています。SOX 指数の天井が近い、と思われます。

6月11日~12日のギャップ(5374-5452)は、上昇トレンド最後の”exhaustion gap”として注目できます。早々にギャップ埋めがあると上昇トレンド終了が暗示され、当面5000処への下振れリスクがあります。

米ドル/円



2011年10月の75.570円以来の(A)-(B)-(C)[ジグザグ]による円安Ⓜ波は、151.899円(22/10/21)を以て終わり、そこから2028年頃までレンジ相場を形成していく、というのが筆者による米ドル/円(ドル/円)の基本観です。直近の34年ぶりドル高・円安も基本的には、レンジ相場内の値動きの一環です。

【月足・エリオット波動分析】

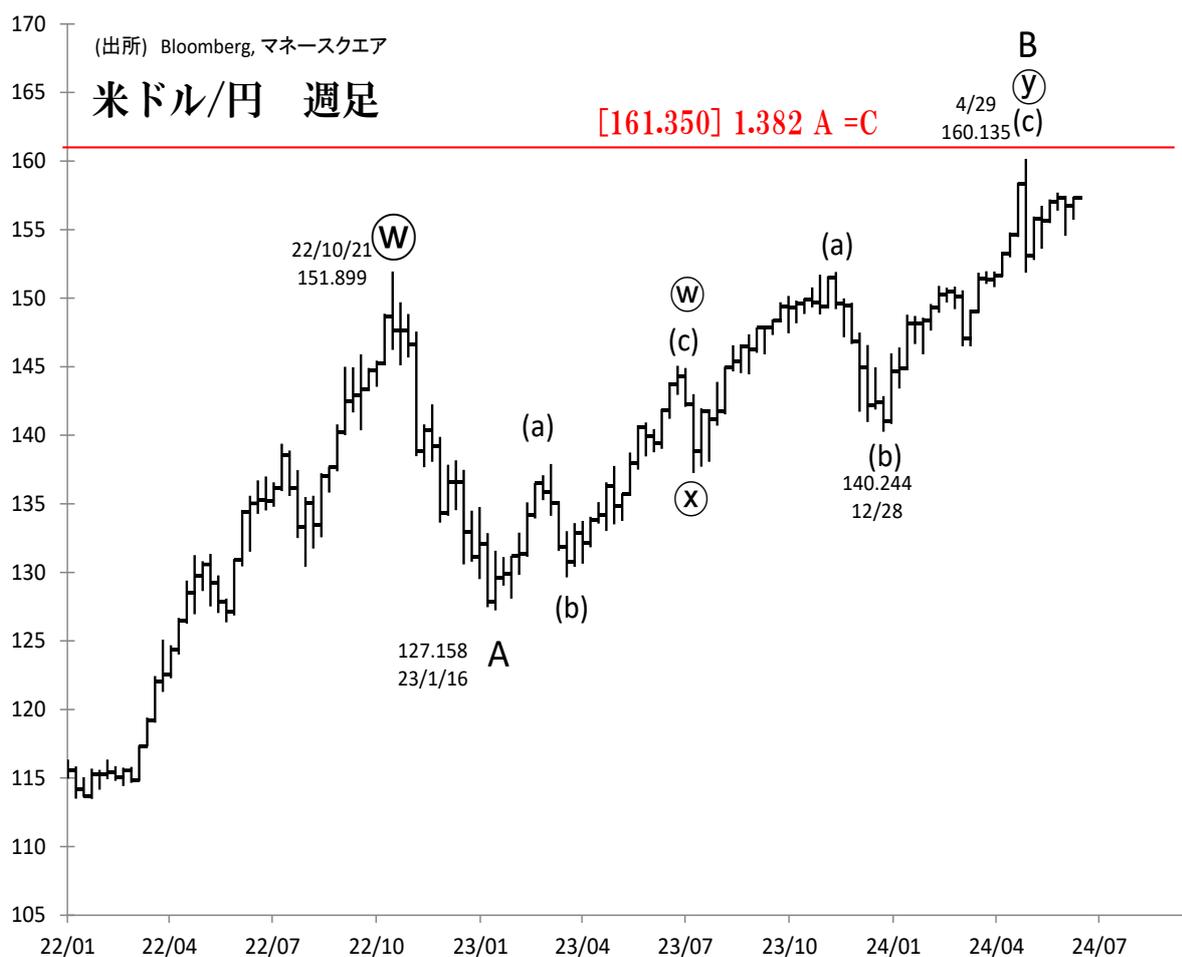
22年10月(151.899円)以来、長期円安トレンドにおける中間波・Ⓧ波が進行中です。

このⓍ波は2028年頃まで大きなレンジ相場(トライアングル、フラットなど)を形成するとみています。

ドル/円は4月29日の160.135円を以て、8年サイクル高値※を付けた可能性があります。

日柄面ではちょうど34年ぶり(フィボナッチ数)に90年4月高値(160.360円)に「里帰り」を果たし、水準面では第(Ⅲ)波中レッサー・ディグリー第IV波の高値に一致しています。

※およそ8年間隔でドル/円高値が巡る『8年サイクル』を振り返ると、過去もっとも長いサイクル期間は106カ月(98年8月～07年6月)でした。前回サイクル高値(15年6月)から106カ月経過時点が24年4月です。

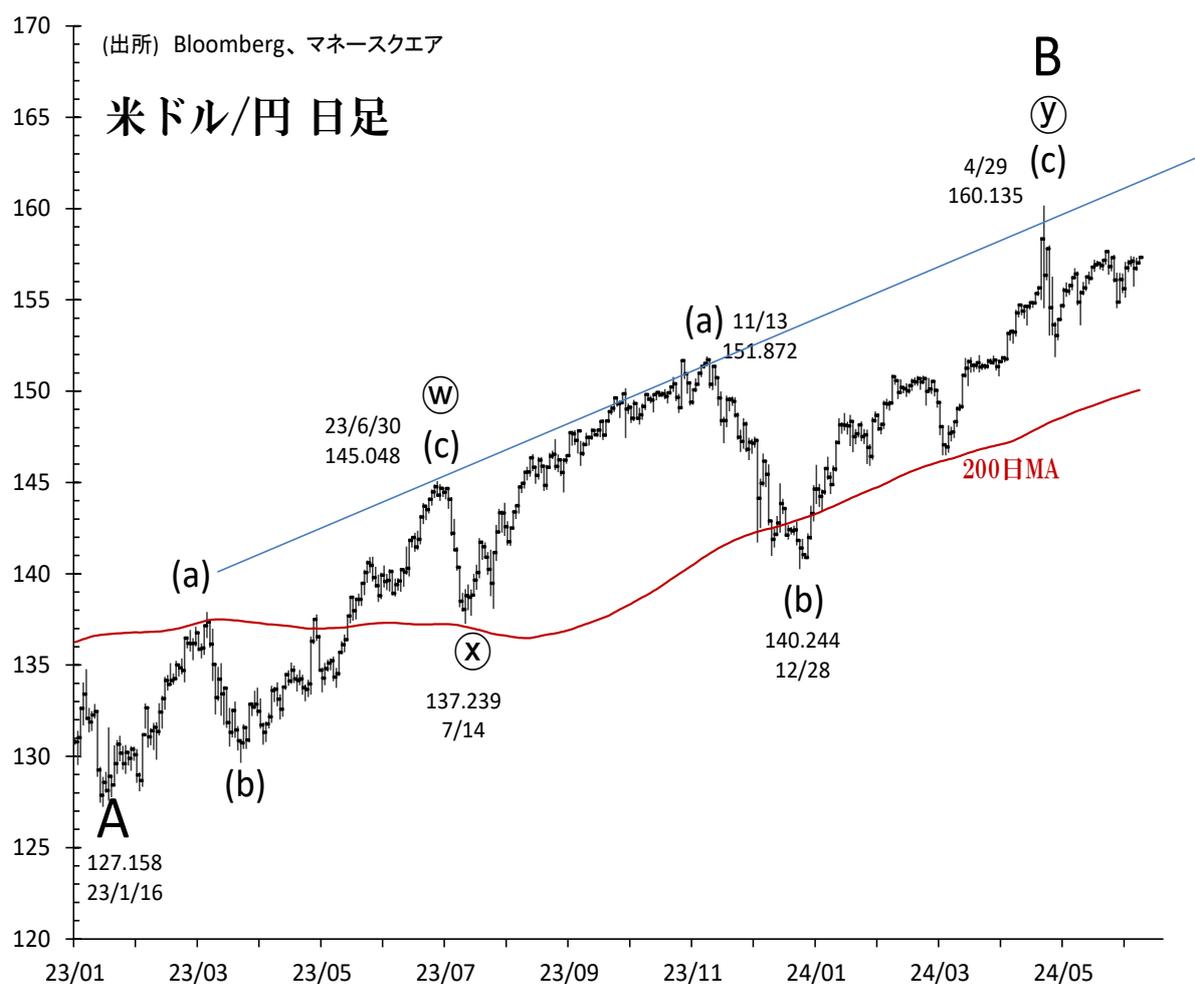


【週足・エリオット波動分析】

22年10月(151.899円)からのA(↘)-B(↗)-C(↘)編成において、23年1月(127.158円)からはB波に位置付けられ、それは151.899円を超えて不規則天井(イレギュラー・トップ)を形成しています。

160.135円をB波終点とみなすと、B波の長さはA波に対し1.333倍になります。B波はA波の1倍超～1.382倍の範囲内で通常は決まりますが、今回のB波もノーマルな範囲内に収まっています。ちなみにA波の1.382倍ならB波トップの目標値は161.350円です。

160.135円(4/29)からC波による下落局面(ドル安・円高)が進行中とみられます。
このC波は今後140円～135円を試す可能性がある、と筆者はみています。



【日足・エリオット波動分析】

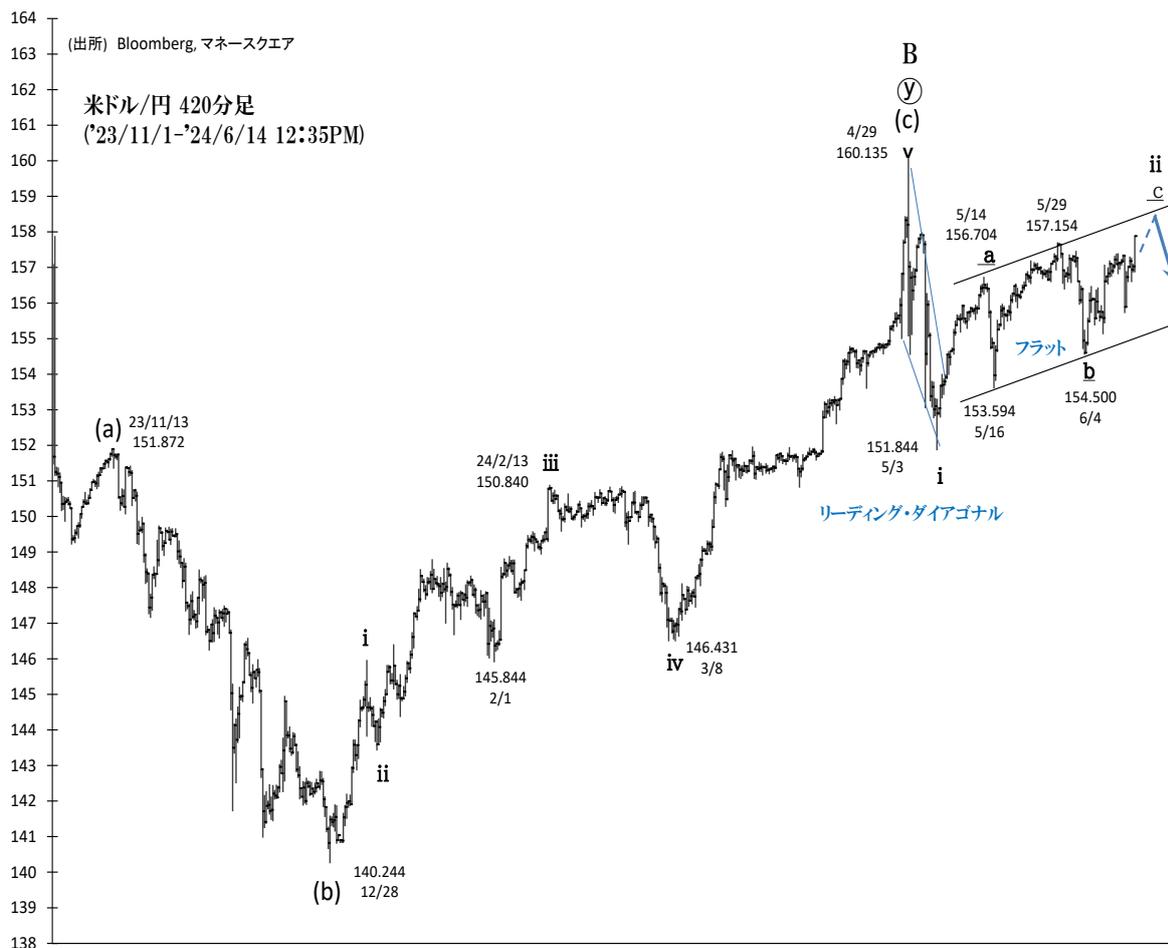
23年1月以来のB波によるドル/円上昇は、[ダブル・ジグザグ]編成で160.135円(4/29)を以て完了したとみられます。

4月に入ってからの急激なドル/円上昇(152円⇒160円)は、日米実質金利差を反映しておらず、専ら投機によってもたらされました。『円安プチバブル』とも呼べる過剰な円安ですが、それも今後は修正されていくと思われます。

[日米実質金利差による推計値]…148.896円

筆者は、米長期金利の大幅な低下⇨大幅な米ドル安を見込んでおり、そうなれば日米実質金利差の縮小に沿ってドル/円は150円を下回っていくでしょう。

そのような局面においては、投機筋による過剰な円売りポジションも解消され、ドル/円の下げは一段と大きくなるのが想定されます。



【時間足・エリオット波動分析】

160.135 円(4/29)から 151.844 円(5/3)までの下落(円高)は、「リーディング・ダイアゴナル」による第 i 波とみえています。

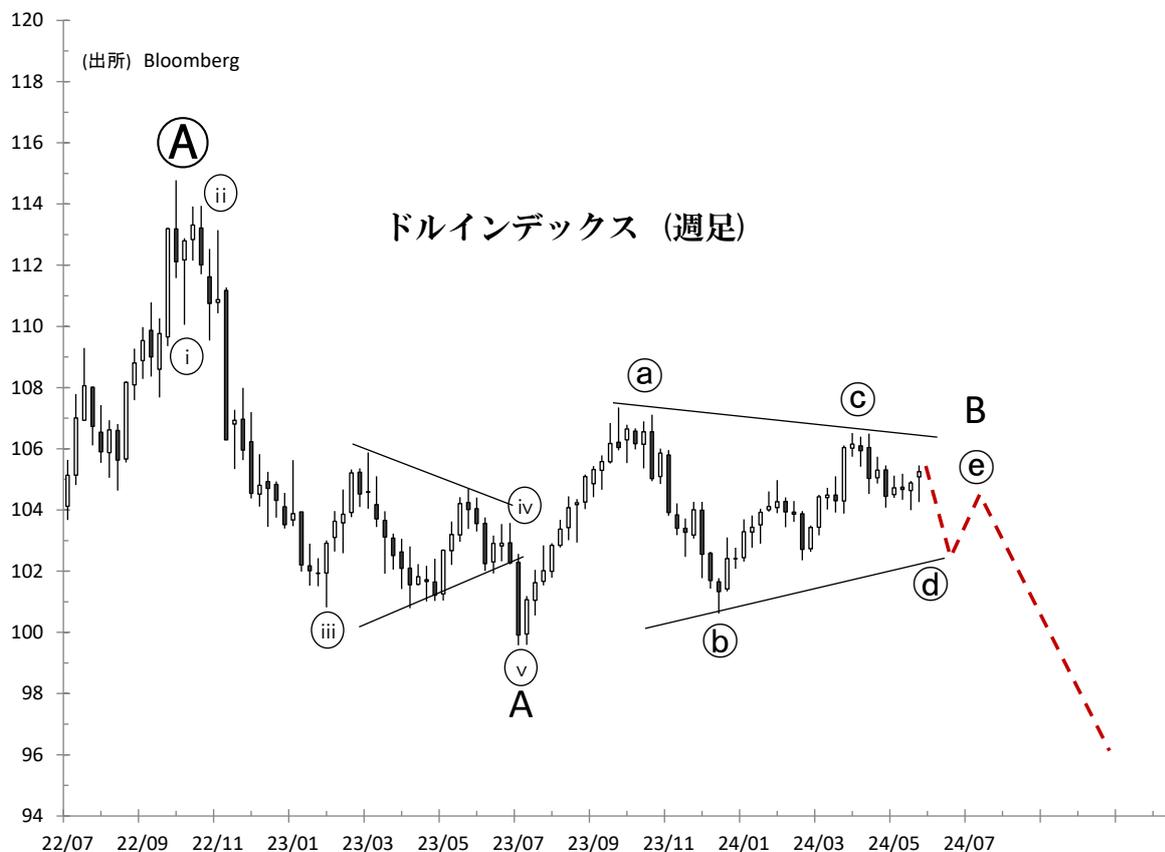
本日 6 月 14 日の日銀決定会合声明を受けて、午後 12 時 24 分からドル/円は強含みました。5 月 29 日の 157.154 円を一時上回り、1 カ月半ぶりドル高・円安となりました。

この動きにより、第 ii 波は続いていることが明らかとなりました。

154.500 円(6/4)からは c 波によるドル高・円安とみられ、その動きを以て第 ii 波は完成し、第 iii 波のドル/円下落となるでしょう。



ドルインデックス (ドル指数)



【週足・エリオット波動分析】

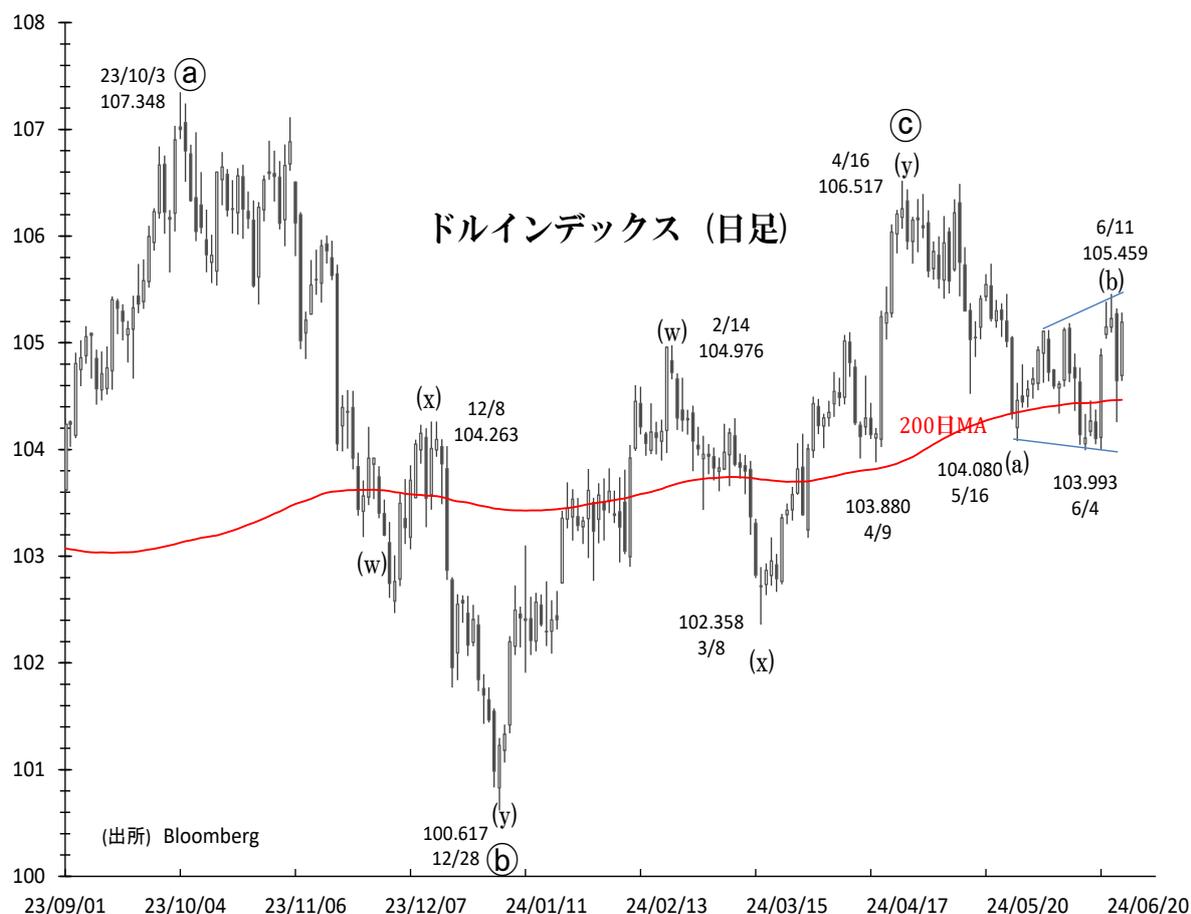
22年9月高値(114.778)以来、ドルインデックスはA(↘)-B(↗)-C(↘)編成による下落基調にあります。23年7月安値(99.578)を起点とするB波は、トライアングル(a-b-c-d-e)を形成中であり、足元は㊦波のドル安局面が進行中です。

おそらく今後の数週間~1カ月以内にB波は完成し、その後に到来するC波によって、ドル指数は23年安値(99.578)を大きく下回るでしょう。

【日足・エリオット波動分析】

104.080(5/16安値)以来の[フラット]は105.459(6/11高値)で完成し、そこからは㊦-(c)波によるドル安に入ったとみられます。この見方は104.257(6/12安値)を下抜くことにより強められます。

㊦-(b)波がまだ続いている、という見方もあります。例えば(b)波は[フラット-x-ジグザグ]編成かもしれません。この場合は目的にも105.459を一時的に上回るでしょう。



※当レポートは、情報提供を目的としたものであり、特定の商品の推奨あるいは特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。

※当レポートに記載する相場見通しや売買戦略は、ファンダメンタル分析やテクニカル分析などを用いた執筆者個人の判断に基づくものであり、予告なく変更になる場合があります。また、相場の行方を保証するものではありません。お取引はご自身で判断いただきますようお願いいたします。

※当レポートのデータ情報等は信頼できると思われる各種情報源から入手したものです。当社はその正確性・安全性等を保証するものではありません。

※相場の状況により、当社のレートとレポート内のレートが異なる場合があります。

当社サービスに関する注意事項

・取引開始にあたっては契約締結前書面をよくお読みになり、リスク・取引等の内容をご理解いただいた上で、ご自身の判断にてお願いいたします。

・当社の店頭外国為替証拠金取引、店頭 CFD 取引および取引所株価指数証拠金取引は、元本および収益が保証されているものではありません。また、取引総代金に比較して少額の資金で取引を行うため、取引の対象となる金融商品の価格変動により、多額の利益となることもあります。お客様が差し入れた証拠金を上回る損失が生じるおそれもあります。また、各金融市場の閉鎖等、不可抗力と認められる事由により店頭外国為替証拠金取引、店頭 CFD 取引および取引所株価指数証拠金取引が不能となるおそれがあります。

・店頭外国為替証拠金取引、店頭 CFD 取引における取引手数料は無料です。

・取引所株価指数証拠金取引における委託手数料は注文が成立した日の取引終了後の値洗い処理終了時に証拠金預託額より、新規および決済取引のそれぞれに徴収いたします。手数料額は、通常 1 枚あたり片道 303 円(税込)、NY ダウリセット付証拠金取引および NASDAQ100 リセット付証拠金取引は 1 枚あたり片道 33 円(税込)です(ただし、建玉整理における委託手数料は無料です)。

・当社が提示するレートには、買値と売値に差(スプレッド)があります。流動性が低くなる場合や、天変地異または戦争等による相場の急激な変動が生じた場合、スプレッドが広がる場合があります。

・店頭外国為替証拠金取引に必要な証拠金額は、個人のお客様の場合、取引総代金の 4%以上です。法人のお客様の場合、取引総代金に、金融先物取引業協会が算出した通貨ペアごとの証拠金率(為替リスク想定比率)を基に当社が算出した証拠金率を乗じた金額となります。為替リスク想定比率は、金融商品取引業等に関する内閣府令第 117 条第 27 項第 1 号に規定される定量的計算モデルを用い算出します。なお、証拠金率(為替リスク想定比率)は変動いたします。店頭 CFD 取引に必要な証拠金額は、取引総代金の 10%です。取引所株価指数証拠金取引に必要な証拠金額は、商品ごとに当社が定める 1 枚あたりの必要証拠金の額に建玉数量を乗じる一律方式により計算されますが、1 枚あたりの必要証拠金額は変動いたします。

金融商品取引業 関東財務局長(金商)第 2797 号

【加入協会】日本証券業協会 一般社団法人 金融先物取引業協会
株式会社マネースクエア
